

衣服と男性用下衣肌着における変遷因子の関係

池田 悟・岡村 好美

Relationship of Changing Factor between Clothes and Men's Underwear

Satoru IKEDA and Yoshimi OKAMURA

I. 緒 言

衣服は第二の皮膚と呼ばれるように、現代人の日常の暮らしにおいて不可欠なものである。衣服の起源は、5～10万年前ヨーロッパを中心に西アジアから中央アジアに分布していたネアンデルタール人によるという説¹⁾が示すように、7万年前にアフリカから派生した人類が寒い地域に移住したことによって考案されたと考えられている²⁾。その後人類は各地に移り住むことによって地域ごとに特殊な衣服様式を形成してきた。今日これらは一般に民族服と呼ばれており、多くの調査がなされている³⁾。現代の世界的な共通服とみなされている「洋服」は、本来ヨーロッパを中心に発展してきた衣服様式である。洋服に関する研究は多数報告されており、特に女性服に関する研究は外衣だけでなく肌着についての文献も少なくない^{4,5)}。しかし男性服は、表着に関する文献は認められるが⁶⁾、肌着に着目した研究は極めて少ない状況である。

本研究は、男性用衣服と肌着の変遷因子の関係性を検討することにより、服飾の基本的な変遷因子を明らかにすることを目指した。

II. 方 法

① 衣服の変遷因子の調査

『服飾変遷の原則』⁷⁾を用いて、衣服の変遷における規則性を調べた。『服飾変遷の原則』は衣服が変化する状況に着目して共通性を検討しているが、本研究では衣服自体の変化に注目して共通性を検討した。

② 男性用下衣肌着の変遷因子の調査

先行調査を用いて肌着の変遷表を作製し、変遷における規則性を抽出して衣服と下衣肌着における規則性因子の関係性を検討した。

Ⅲ. 結果および考察

① 衣服における変遷因子の検討

小川は『服飾変遷の原則』で、服飾が変遷してきた状況は、「変遷の誘因」、「変遷の動態」、「変遷の型式」、「変遷の静態」、「変遷の帰結」の5つに分類できると考え、さらに20項目に細分化して、これが原則であるとしている。本研究では先ず、小川が原則化に用いた事例について衣服自体の変化に着目して衣服の変遷因子の共通性を検討した。小川が例示した195の事例について抽出された共通因子を5つの各分類ごとに表1に示す。《 》内の番号は同じ内容の事例を示す。

< 1 > 変遷の誘因

変遷のきっかけは、自然環境と社会環境または社会状況等の外因と人間の心理的欲求である内因という状況における優位の判断に基づいている。このときの衣服自体の変化は、事例①a・c・d・e・f・i、③a・b・eは、衣服形状が体形型へ変化していることを示している。事例①b、③c・fは、衣服形状、被覆面積、布重量が変化または不変であることを示している。事例①g・h、②c～e、③i・hは、衣服が体を覆っている面積が変化しているまたは不変であることや、面積の変化に伴って衣服の重量が減少していることを示している、と考えられる。

< 2 > 変遷の動態

衣服変化のスピードや流れは、環境や文化という状況によって異なると考えられる。このときの衣服自体の変化は、事例④a、⑤n・oは、衣服が体を覆っている面積の変化に伴って衣服の重量が変化していることを示している。事例④f・g・h、⑤a・b・c・dは、衣服形状が体形型へ変化する場合と変化しないことがあることを示している。事例⑤h～l、⑥a・b、⑦b～e・h～jは、簡略化や装飾化によって衣服の重量が変動していることを示している、と考えられる。

< 3 > 変遷の型式

衣服の変遷は、衣服の使い方という状況において認められる。このときの衣服自体の変化は、事例⑧a・e・h・l～n・p・q、⑨a～f・k、⑩a・b・e、⑪a～e・h～l、⑫a・g、⑬a・c・f・k、⑭j・sは、衣服が体を覆っている面積が変化していることを示しており、事例⑧o、⑨a～f・h、⑩a・b、⑪c～e・g～l、⑫a・g、⑬aは、被覆面積の変化によって衣服の重量が変化していることを示している。事例⑧b～d・g・i～k・p・r、⑨j・l、⑩f、⑪b～f・h～j、⑫c・dは、簡略化や装飾化によって衣服の重量が変動していることを示している。また、事例⑨g・i、⑩d、⑬g、⑭b～f・m～rは、衣服形状が変化しているものや男女で異なるまたは同じものを着用していることを示している、と考えられる。

< 4 > 変遷の静態

衣服の変遷は、巨視的には変化していない状況が認められる。このときの衣服の状態として、事例⑮a・b・d～f、⑯cは、状況によって形状変化に影響する場合と影響しない場合があることを示している。事例⑮c、⑯a・b・c・b・g～j、⑰a・bは、衣服形状、被覆面積、布重量が不変であることを示している、と考えられる。

< 5 > 変遷の帰結

変化は斬新性に向かうばかりでなく、状況によっては帰結したり元の形に戻ることがあると考えられる。この場合の衣服の変化は、事例⑱a・b、⑲gは、衣服形状、被覆面積、布重量が不変であることを示している。事例⑲a～f・q～sは、社会環境の変化により衣服形状を変化させ

ることや衣服形状を維持することがあることを示している。事例⑩i~l・n~pは、衣服重量の変化によって体形型から離脱することを示している、と考えられる。

以上のように衣服の変化における共通性は、着用基体である人体を衣服が覆う面積の変化や着脱による衣服の重量変化および、着衣形状の変化であると考えられた。

② 男性用下衣肌着の変遷における共通因子の検討

着用衣服の最内衣を肌着として、文献^{8~10)}より男性用下衣肌着の変遷表を作成して表2に示す。表より、古い時代に肌着を使用していた地域は地中海周辺地域であったことや、地域によって肌着の形状や着衣方法、素材に異なりが認められ、肌着の着衣には地域の影響が深く関係していると思われた。

また、肌着には一部式と二部式の形状が認められ、着衣方法や身体の覆い方が異なることが示された。衣服による身体の覆い方を、身長に対する肌着の被覆長として図1に示す（注：ふんどしは、体側を被覆しないために図1には該当しない）。肌着で体を覆う面積は、増減を繰り返しながら19世紀のユニオンスーツ着用以降は減少している。このことから被覆面積の変化は、肌着の変化因子の一つであると考えられる。またブラコ、ドロワーズ、トランクス、ブリーフ、ボクサーなどのズボン状肌着において異なった丈のものが認められることも、被覆面積の変化が共通因子であると考えられた。

表1-1. 服飾変遷の原則の事例『変遷の誘因』

<p>① 環境順応の原則</p> <p>a. 世界的な気候の変化(シリア、北アラビア、エジプト、トルキスタン)と14世紀欧州での酷寒による被覆の体形型化の確立：衣服形状の変化 b. 日本の寒暖周期700年説に順応した軽装化(寒期に服制移入や洋服化、暖期に小袖文化の展開など)：衣服形状、被覆面積、布重量の変化 c. 奈良時代における隋・唐から服制の移入により体形型系へ《①i, ③a, ⑤c, ⑩d》：衣服形状の変化 d. 明治維新以来、欧米文化流入による、洋服化《①i, ③b, ⑤d, ⑩d, ⑩f, ⑩g》：衣服形状の変化 e. ロマネスク様式誕生により形態が体形型へ《⑤a》：衣服形状の変化 f. ゲルマンの大移動により、ズボン型式へ：衣服形状の変化 g. 民族移動・原住民の気候や生活様式に順応した独特の衣生活(防寒衣料、裸体生活など)：被覆面積、衣服重量の変化 h. イスラム教や回教の教義の強制によりターバンやチャドルなどの全身包被の習俗の伝承《③h, ④j》：被覆面積の不変 i. 外来服飾の移植(日本奈良時代の服制の導入、日本明治の欧米流入、アレキサンダー東征、十字軍の西移)による体形型化《①d, ③b, ⑤d, ⑩d, ⑩f, ⑩g》《①c, ③a, ⑤c, ⑩d》：衣服形状の変化 j. 低文化の優勢集団が高文化の劣勢集団を模倣</p>	<p>② 内因優越の原則</p> <p>a. 徳川時代の服飾禁令の多発(庶民服豪華に) b. チャドル禁止令が無意味(教義に従い着用) c. チャドルの簡略化(布の縮小)：被覆面積、衣服重量の変化 d. 平安時代に礼服として元の朝服である束帯が用いられ、鎌倉時代には礼服として束帯の略式である直衣が用いられる《②e, ⑨c, ⑩a》：被覆面積、衣服重量の変化 e. 平安時代に礼服として元の朝服である束帯が用いられる《②d, ⑨c, ⑩a》：被覆面積、衣服重量の変化</p>
	<p>③ 優勢支配の原則</p> <p>a. 奈良時代における隋・唐から服制の移入により体形型系へ《①c・l, ⑤c, ⑩d》：衣服形状の変化 b. 明治維新以来、欧米文化流入による洋服化《①d・i, ⑤d, ⑩d, ⑩f, ⑩g》：衣服形状の変化 c. 西欧人の米侵入、南米植民地化されるも原住民は民族服伝統を保持：衣服形状、被覆面積、布重量の不変 d. 中央・都市→地方・辺境へ服飾文化の展開 e. ゲルマン民族は耐寒と生活活動に順応するため体形型へ：衣服形状の変化 f. 新旧勢力の興亡による服飾の変遷(鎌倉時代武家の伸長により直垂系統が支配し、後に小袖が発達するような、支配者の変化による機能化)：衣服形状、被覆面積、布重量の変化 g. 満州族の弁髪胡服が中国を支配し体形型へ：衣服形状の変化 h. イスラム教や回教の教義の強制によりターバンやチャドルなどの全身包被の習俗の伝承《①h, ④j》：被覆面積の不変 i. フランス革命により、長いズボン型式へ《⑩e, ⑩q》：被覆面積の変化</p>

表1-2. 服飾変遷の原則の事例『変遷の動態』

④ 模倣流動の原則	<p>a. 藤原時代の労働着であった狩衣が、鎌倉時代には武家の礼装に（礼服の簡素化）《⑨e, ⑤j, ⑩f》：被覆面積、布重量の変化</p> <p>b. 旅鼠の集団移動の習性は追従模倣のモデル</p> <p>c. 藤原時代やルイ王朝時代など上層と下層の身分差が大きい場合、同一関心・環境がないため模倣生じない</p> <p>d. 武家の礼装である半袴が町民の礼装として用いられる</p> <p>e. アレキサンダー東征・十字軍の東方遠征・遣唐使の往来・南蛮人の交易来訪・ジンギスカン軍・サラセン軍、張騫・玄奘三蔵・マルコポーロ・コロンブス・支倉常長、宗教・思想・イデオロギーなどを媒体とする伝播</p> <p>f. 体形型の伝承（古墳時代の衣袴・衣裳、ゲルマン人など）：衣服形状の不变</p> <p>g. 儀式の場合の束帯・袴袴やヨーロッパ宮殿護衛兵の礼服の伝承：衣服形状の不变</p> <p>h. 筒袖と二股ズボン型式が世界各民族に伝承：衣服形状の不变</p>	<p>⑥ 逆行変化の原則</p> <p>a. 簡素機能化の動向（19世紀の男装の装身的なテールコートがサックコートへ簡略化され日常服化。装飾的な晴の服（十二単）が省略簡略化→ケの服として常用化）：布重量の変化</p> <p>b. 複雑装飾化と簡素機能化の繰り返し（スカートなど）：布重量の変化</p> <p>c. ファージンゲール→パニエ→クリノリン→パスルへ膨大化の波の繰り返し</p> <p>⑦ 競進反転の原則</p> <p>a. ゴシック時代のヘナン、ロココ調の髪飾りの膨大化（高さへの競進）</p> <p>b. 下襲の裾の伸長（長さへの競進）：布重量の変化</p> <p>c. トレーンの伸長（長さへの競進）：布重量の変化</p> <p>d. ファージンゲール、パニエ、クリノリン、パスルなど下肢の膨大化《⑤h・l, ⑥c, ⑦l》：布重量の変化</p> <p>e. ショース、パド＝ショースなど上衣の膨大化：布重量の変化</p> <p>f. ロココ時代の婦人髪型の膨大化による競進</p> <p>g. コルセットによる細さへの競進</p> <p>h. 十二単の襲色目による競進：布重量の変化</p> <p>i. シュミーズ＝ドレスの薄着への競進：布重量の変化</p> <p>j. 季節に適した襲色目へ：布重量の変化</p> <p>k. 和装の模様（小袖の発達と染色技術の進歩）</p> <p>l. ファージンゲール、パニエ、クリノリンの膨大化→パスルの後曳性へ（膨大化の部分の変化）《⑤h・l, ⑥c, ⑦d》</p>
⑤ 漸変貫化の原則	<p>a. 衣袴・衣裳の服装（体形型）は胡服に由来し、底流で伝承し変化乏しい：衣服形状の不变</p> <p>b. 北ヨーロッパあたりの民族の体形型衣服が現代国際服の型式に：衣服形状の変化</p> <p>c. 奈良時代における隋・唐から服制の移入により体形型系へ《①c・i, ③a, ⑩d》：衣服形状の変化</p> <p>d. 明治維新以来、欧米文化流入による、洋服化《①d・i, ③b, ⑩d, ⑩f, ⑩g》：衣服形状の変化</p> <p>e. 造繊維の開発（比較的速く普及）</p> <p>f. 産業革命による衣生活の変革（機械化）</p> <p>g. ビサンチン服飾、和服など長円筒型変化乏しい</p> <p>h. ファージンゲール、パニエ、クリノリン、パスルなど上軽下重型は膨大・縮小化の変化多《l,c,d・l》：布重量の変化</p> <p>i. プールポワンなど上重下軽型は縮小化の変化多：布重量の変化</p> <p>j. 奈良時代服制が移入されるも、藤原時代狩衣・水干など略服が制定される《④a, ⑨e, ⑩f》：被覆面積、布重量の変化</p> <p>k. 四季における気候変化に適応し襲衣・脱衣：布重量の変化</p> <p>l. 過度の装飾化により簡略化（十二単、ファージンゲール、パニエ、クリノリン）《⑤h, ⑥c, ⑦d・l》：布重量の変化</p> <p>m. 奢侈禁止令による衣料転換（江戸）→着慣れの抵抗</p> <p>n. スカート丈の上昇（1880～1977）：被覆面積、布重量の変化</p> <p>o. スカート丈上昇の仮想（1980～2080）：被覆面積、布重量の変化</p>	

表 1-3-1. 服飾変遷の原則の事例『変遷の型式』(1)

<p>⑧ 表衣脱皮の原則</p>	<p>a. ロープ=デコルテ、クレタ島の女性(被覆部と裸出部の共存)：特異な被覆面積 b. 十二単が簡略化、上衣がつつぎに脱皮され、下着だった小袖の表衣化：布重量の変化 c. 背広上衣脱衣によるワイシャツの表衣化：布重量の変化 d. チュニックの表衣化(トガの退化)：布重量の変化 e. 直垂系統の袴の大腿部が広く開く⇒小袖の表衣化、女装の長い裾を尾っぽしよる⇒ももひき姿(下着)の表衣化：被覆面積の変化 f. ワイシャツの表衣化に伴う、ワイシャツの装飾化 g. 戦術の変化による鎧兜の軽装化《f》：布重量の変化 h. 表スカートの前開きが大きくなり、アンダー=スカートやベチコートの表衣化：被覆面積の変化 i. 十二単の裳の簡略化(表衣だったものが退化)：布重量の変化 j. ジュストコールとマントであったものが簡略化(装飾化)されフロック=コート、モーニング=コート、燕尾服のテールとして残存：布重量の変化 k. 日本近世の腰巻姿(夏季に上着を脱いで腰に巻いて着用したこと)から：衣服重量の変化 l. 長い表スカートの裾が上昇し、アンダー=スカートやベチコートの表衣化：被覆面積の変化 m. ミニスカート化によるストキングの着用：被覆面積の変化 n. 胴衣の長い裾が短縮⇒現在のチョッキへ：被覆面積の変化 o. キリスト教により、女性は腕をおおう型式だったが、17世紀から袖の縮小化による腕の裸出：被覆面積、布重量の変化 p. 新表着であるトガの登場による、チュニックの下着化：布重量の変化 q. プールボワンの縮小化・下着化⇒ベストに変容：被覆面積の変化 r. 南米インディオのスカートの重ね着による表スカートの下着化：布重量の変化</p>	<p>k. ロング=スカートはショート=スカート採用により格式が上昇：被覆面積の変化 l. 男子スーツ(元来モーニングの略式であったが、現代までに礼装化)：布重量の変化</p>
<p>⑩ 格式低下の原則</p>	<p>a. 平安時代に礼服として元の朝服である束帯が用いられ、鎌倉時代には礼服として束帯の略式である布袴、衣冠が用いられる《②d・e, ⑨c》：被覆面積、布重量の変化 b. ローマ衰退と共にトガの衰退(裾を短くする、または帯状に巻くなど)：被覆面積、布重量の変化 c. プールボワンは過度な装飾のために衰退し、ジュストコルが登場：被覆面積の変化 d. 在来服の低下(奈良時代における服制の移入による体形化、明治維新以降の欧米文化流入による洋服化)《①d・l, ③b, ⑤d, ⑤f, ⑩g》《①c・i, ③a, ⑤c》：衣服形状の変化 e. フランス革命により長ズボン型式へ(半ズボン型式の低下)《③i, ⑩q》：被覆面積の変化 f. 戦術の変化による鎧兜の軽装化《⑧g》：布重量の変化 g. 色彩・文様(庶民が上位の服飾を模倣) h. 世界各地の民族服飾の色彩・文様(庶民が上位の服飾を模倣)(西トルキスタンのハンアトラス、インドネシアのジャワ更紗、スコットランド源流のタータン=プレート)のチェック模様など i. 服飾制度の改廃による不用廃絶(日本の袴、フロックコート)</p>	<p>a. 平安時代に礼服として元の朝服である束帯が用いられ、鎌倉時代には礼服として束帯の略式である布袴、衣冠が用いられる《②d・e, ⑨c》：被覆面積、布重量の変化 b. ローマ衰退と共にトガの衰退(裾を短くする、または帯状に巻くなど)：被覆面積、布重量の変化 c. プールボワンは過度な装飾のために衰退し、ジュストコルが登場：被覆面積の変化 d. 在来服の低下(奈良時代における服制の移入による体形化、明治維新以降の欧米文化流入による洋服化)《①d・l, ③b, ⑤d, ⑤f, ⑩g》《①c・i, ③a, ⑤c》：衣服形状の変化 e. フランス革命により長ズボン型式へ(半ズボン型式の低下)《③i, ⑩q》：被覆面積の変化 f. 戦術の変化による鎧兜の軽装化《⑧g》：布重量の変化 g. 色彩・文様(庶民が上位の服飾を模倣) h. 世界各地の民族服飾の色彩・文様(庶民が上位の服飾を模倣)(西トルキスタンのハンアトラス、インドネシアのジャワ更紗、スコットランド源流のタータン=プレート)のチェック模様など i. 服飾制度の改廃による不用廃絶(日本の袴、フロックコート)</p>
<p>⑨ 形式昇格の原則</p>	<p>a. 狩衣・水干・直垂、袴、小袖(元来身分の低い衣服・下着として着用していた物を礼装として用いる)：被覆面積、布重量の変化 b. 直垂(武家の伸長と共に、礼装化)：被覆面積、布重量の変化 c. 衣冠、直衣(束帯から簡略分化するも、鎌倉時代正装となり装飾化を進める)《②d・e, ⑩a》：被覆面積、布重量の変化 d. 狩衣・水干、直垂(武家の伸長と共に、礼装化)：被覆面積、布重量の変化 e. 狩衣(藤原時代の労働着→鎌倉時代には武家の礼装に)《a, f, j》：被覆面積、布重量の変化 f. 元来庶民着として用いていた指貫を鎌倉時代に制式化：被覆面積、布重量の変化 g. ダルマティカ(土俗的な民族服⇒装飾化され古代ローマの上層階級が着用)：衣服形状の変化 h. 肩衣(武家の伸長と共に肩衣である袴が礼装化)：被覆面積、布重量の変化 i. 古代ギリシャのヒマチオン、古代ローマのトガ(元々亜熱帯・熱帯の原始服)：衣服形状の変化 j. テール=コート、フロック=コート(ジャケット誕生により礼装用へ)：布重量の変化</p>	<p>a. 貫頭型被服はボンチョ、ペプロス、ウィーピール、キトンなどに分化：被覆面積、布重量の変化 b. 垂布型の巻付け衣はヒメーション、トガ・パラ、亜熱帯・熱帯の原住民の巻衣、サリー、パレオなどへ分化：被覆面積、布重量の変化 c. 束帯の簡略化により布袴や衣冠へ分化：被覆面積、布重量の変化 d. 直垂の簡略化により大紋、素襖、鎧直垂へ分化：被覆面積、布重量の変化 e. トガ、チュニックは階級別に色彩・装飾・着装によって分化 f. 狩衣(藤原時代の労働着→鎌倉時代には武家の礼装に)階級別に色彩が分化《④a, ⑤j, ⑨e》 g. 鎧直垂(外装としての直垂を、鎧の下着として用いる)：布重量、被覆面積の変化 h. 直垂の簡略化による素襖へ分化：被覆面積、布重量の変化 i. 民間外装用衣服である十徳・道服、羽織・合羽などは袖や丈の長さを用途別に分化：被覆面積、布重量の変化 j. 袴類である野袴、馬乗袴、カルサン、裁付は裾の長さなどを用途別に分化：被覆面積、布重量の変化 k. コート類であるレーン・トレンチ・バイク=コートなどは丈の長さなどを用途別に分化：衣服重量の変化 l. 小袖(胴着、襦袢、長襦袢など)：被覆面積、布重量の変化</p>

表 1-3-2. 服飾変遷の原則の事例『変遷の型式』(2)

⑫ 不 用 退 化 の 原 則	<ul style="list-style-type: none"> a. 例⑧-h, 1による長い表スカートの退化：被覆面積、布重量の変化 b. 衿飾りのラフの縮小化：布重量の変化 c. 狩衣・水干・直垂のくくりひもの簡略化：布重量の変化 d. 十二単などの襲色目による重ね着を、色布のみを重ねることによって脱衣：布重量の変化 e. 礼服の裾→十二単の腰に付いた長い裳へ縮小化：布重量の変化 f. 衣裳姿における長い裳→中世庶民女子の腰裳へ縮小化：布重量の変化 g. 胴衣の長い裾の上昇(退化)→チョッキ型式へ：被覆面積、布重量の変化 h. 衿の切れ目、後ろ裾のベンツ、袖のボタンと合わせ目など背広に装飾化され残存：布重量の変化 i. コート類の飾りボタン装飾化され残存：布重量の変化 j. コート類のバック=バンド装飾化され残存：布重量の変化 	⑭ 性 別 対 立 の 原 則	<ul style="list-style-type: none"> a. アダムとイブによる性差意識の始まり b. 洞窟の人物像(男性はズボン、女性はスカート)：衣服形状の変化 c. ヨーロッパ青銅時代の被服類(男子はズボン型式、女子はスカート型式)：衣服形状の変化 d. 古代エジプト(男性はシャンティ、女性はチュニックとドレーパリー)：衣服形状の変化 e. 古墳時代の埴輪(男子はズボン型式の褌、女子はスカート型式の裳)：衣服形状の変化 f. 未開発の原住民(男性は腰紐、女性は腰蓑)：衣服形状の変化 g. ビサンチン時代の装身具や文様などによる差異 h. 和服は男子のつい丈、女子のおはしょりと広帯縮めの相違と色彩模様の差異(同じ前開型) i. 男女の重心の差異(ブルボワンとパニエなど) j. イスラム教や回教の教義の強制により男子はターバン、女子はチャドルなどの全身包被の習俗による性差(①h, ③h)：被覆面積の変化 k. 男性用シューズとしていた物を女性用ストッキングとして用いる l. ブーツ(男性用→女子用へ) m. 男性のスカート型式や女性装身様式の着用(バロック、ルイ14世)：衣服形状の変化 n. 男子のスカート型式の着用(バビロン王、古代ローマの将軍、スコットランドのキルト、土民服、腰巻衣)：衣服形状の変化 o. 女性のズボン型式の着用(スラックス・パンタロン・ももひき)：衣服形状の変化 p. スポーツウェア(男女同型)：衣服形状の変化 q. 軍装・忍者服などの婦人装備は男子と同じ型式：衣服形状の変化 r. 特殊服の男女類似(潜水服、宇宙服など)：衣服形状の変化 s. 被覆面積の性差異(近世から女装の皮膚裸出、男装の体形被覆)：被覆面積の変化
⑬ 無 縁 類 同 の 原 則	<ul style="list-style-type: none"> a. ネアンデルタル人とエスキモーの防寒衣料の類似：被覆面積、布重量の類似 b. 世界各地で紡錘車の発見 c. トレーンや束帯の裾などの後曳性(人体構造・機能に基づく共通性)の類意：布重量の類似 d. トレーンと束帯の裾(後曳性)の類似：布重量の類似 e. 熱帯原住民と日本現代庶民のエプロンの類似：被覆面積の類似 f. 回教徒女性の慣用するチャドル系統の覆面と東北地方農婦のハンコタナの類似：被覆面積の類似 g. 西洋のプレート=アーマーと日本の鎧兜の類似：衣服形状の類似 h. チョピンと下駄(下方性)の類似 i. 西洋と江戸遊女の高い髪型や髪飾り(上方性)の類似 j. ドレーパリー、貫頭衣の世界広汎な着用 k. 貫頭衣の発想の世界的類似(例-a)：被覆面積の変化 l. 縷れ織の色彩文様(南米ブレインカ、アンデス、古代エジプト)、羅(南米ブレインカ、アンデス、漢)などの世界的類似 		

表 1-4. 服飾変遷の原則の事例『変遷の静態』

<p>⑮ 融合 消 化 の 原 則</p>	<p>a. 十字軍の東方遠征によるゴシック様式の誕生⇒体形型へ《e》：衣服形状の変化 b. 衣袴型式と狩衣の融合による直垂の誕生(上下二部式構成へ)：衣服形状の変化 c. 奈良時代における服制の移入⇒日本の気候に適す肩衣・袴・小袖・羽織へ：衣服形状、被覆面積、布重量の変化 d. 南蛮文化の移入によりカルサン(ズボン型式)を模倣・消化⇒旅装用・仕事着として普及：衣服形状の不変 e. 中国で、清(北方系)と明(東方系)が融合し支那服(体形型)へ：衣服形状の変化 f. 明治維新以来、欧米文化流入により、洋服化(服飾系統が異なるため混交・混成) 《①d・i、③b、⑤d、⑩d、⑯g》：衣服形状の変化 g. 和服型式と洋服型式の並存(同化が不可能なため)</p>	<p>⑰ 孤 立 爛 熟 の 原 則</p>	<p>a. クレタ島の特殊な服飾型式(男女とも胴を極端に細くして帯を用い、腰布を着用し、とくに女子は胸部をあらわにした胴衣、いくつかの横襷をつけた足先までの釣鐘状のスカート、腰から前後面に楕円形に垂れたエプロン、冠り物、数多い装身具など)は、クレタは孤島で外部の侵略を受けることなく爛熟：衣服形状、被覆面積、布重量の不変 b. 幕府の政治権力の安定による地方の生産性の向上・都市の商業活動の隆盛・物資の流通消費の増大により、小袖文化の発達⇒小袖の華美豪華に(政府は約180年間に18回奢侈禁令発布)：衣服形状、被覆面積、布重量の不変 c. 古代エジプト王朝文化、ピサンチン時代文化、エリザベス王朝文化、ルイ王朝文化、アステカ文化、インカ文明、奈良朝文化、平安文化など、民族と時代によって異なるが、文化の向上・成熟が進み爛熟退廃の域に達する。</p>
<p>⑯ 停 滞 残 存 の 原 則</p>	<p>a. 和服の残存・・・明治維新以来、洋服と対立位置にあり広く残存慣用されてきたため：衣服形状、被覆面積、布重量の不変 b. 南米のアンデス山系のインディオの服飾(男装として巻きスカート、貫頭シャツ)がスペインの植民地になり多少変化するが伝統的な型式は残る：衣服形状、被覆面積、布重量の不変 c. 日本各地の内陸山間部・離島などの働き着(筒袖の上衣、ももひき・もんぺなどの二股下衣の二部式構成)：衣服形状の不変 d. 一般の人々と隔絶している集団(日本の平家谷)は、特殊な様式を伝承・残存：衣服形状、被覆面積、布重量の不変 e. 現代の祭礼などでは、古い伝統的な装束や装備などを模倣：衣服形状、被覆面積、布重量の不変 f. ジャワ更紗の『バラクルサク』文様やソ連領中央アジアの『ハンアトラス』文様など旧来の伝統的図案を残存 g. 少数民族・地理別民族(日本のアイヌ風俗やオーストリアのチロル風俗など)で特色ある服飾を残存：衣服形状、被覆面積、布重量の不変 h. 農民・漁夫などや、神官・僧侶の制服、職人風俗、相撲風俗は旧態のまま(伝統的に)残存(職業的特殊風俗)：衣服形状、被覆面積、布重量の不変 i. 遊牧民・サーカス風俗、婚礼・葬式・田植・祭礼風俗など地方で旧制を残したもの：衣服形状、被覆面積、布重量の不変 j. 宗教による特殊な様式の残存(仏僧、キリスト教聖職者、回教徒など)：衣服形状、被覆面積、布重量の不変</p>		

表 1-5. 服飾変遷の原則の事例『変遷の帛結』

⑬ 不 変 定 着 の 原 則	<p>a. 和服（小袖）は高温多湿の自然環境に適し、さらに鎖国などによって爛熟⇒着用範囲は狭められるが、日本民族服飾として伝承：衣服形状、被覆面積、布重量の不变</p> <p>b. 日本の女羽織、羽織は元来男子用の衣服だったが、18世紀中ごろ流行・一般化し、婦人和装として風俗化：衣服形状、被覆面積、布重量の不变</p>	<p>r. 和服の袂を襷で縛り裾をからげて下肢を露出、職人や農民の服装・火事装束・遊芸人などの筒袖上衣ともみひき・かるさん・もんぺなどの二股ズボン型式(体形型に近接)：衣服形状の変化</p> <p>s. ルネサンス期に描かれた農民や羊飼いは、筒袖の上衣とズボンの組み合わせで、農婦は筒袖のブラウスにショート＝スカートで近代的女装と同型：衣服形状の類似</p>
⑭ 礎 型 復 帰 の 原 則	<p>a. 後期旧石器時代のクロマニヨン人の洞窟画や岸壁画(男子の半ズボン型、女子のスカート型で体形型)の衣服形状と現代の衣服形状の類似：衣服形状の類似</p> <p>b. ヨーロッパ青銅時代の出土品の資料(男子は筒袖チュニックと二股ズボン、女子は筒袖貫頭衣と巻きスカートで体形型)の衣服形状と現代の衣服形状の類似：衣服形状の類似</p> <p>c. 古墳時代の埴輪の人像(男子の筒袖で前合わせの上衣とズボン、女子の筒袖上衣と巻きスカートの体形型)の衣服形状と現代の衣服形状の類似：衣服形状の類似</p> <p>d. 古墳時代の体形型の原型と大陸の胡服の類似：衣服形状の類似</p> <p>e. B.C.8～3世紀ごろ、地中海文明の北辺、黒海の北岸地方では、内陸の激しい気候や地形に適応し、とくに騎乗に適応するために体形型へ：衣服形状の類似</p> <p>f. 北方辺境の地方、北欧・北海地方の人々は、気候に適応し、狩猟・遊牧・争闘などの生活活動のため体形型へ(現代の衣服形状へ)：衣服形状の類似</p> <p>g. 日本小袖文化にあっても、職人・火消人足・遊芸人・旅人・農婦などの活動生活者は、筒袖の上衣と二股のズボン型式の下肢被服《d・i,b,d,d,f》：衣服形状、被覆面積、布重量の不变</p> <p>h. 高下駄やチョピン、プーレース、クラコーなどの尖り靴は下方へ伸長しながら体形型からの離脱</p> <p>i. 束帯の裾やトレーンの後曳性の伸長による体形型からの離脱：布重量の変化</p> <p>j. 江戸遊女衣装の厚ぶきによる下肢被服の膨大化による体形型からの離脱：布重量の変化</p> <p>k. 十二単や束帯(強装束)の左右への膨大化による体形型からの離脱：布重量の変化</p> <p>l. 日本的衿の垂衿の不变{中国的衿の磐領(僧鋼衿)との比較}：布重量の不变</p> <p>m. 16～17世紀ゲルマン民族は、防寒のために衿(ラブ)を豪華にするも不便なため前開きによる礎型からの離脱</p> <p>n. 振袖、礼服の大袖、束帯の袍の広袖など袖の膨大化による体形型からの離脱：布重量の変化</p> <p>o. ブリオー、コタルディ、ティパット、フープランド(婦人服のスリーブの袖口を長く垂らす型式)、バッグ＝スリーブ、マンシュロン、ウェアリング＝スリーブ、レグ＝オブ＝マートン＝スリーブなど多種類の袖型の発生による体形型からの離脱：布重量の変化</p> <p>p. 室町～江戸時代にかけての女帯強調(最大4.4m.)による体形型からの離脱：衣服重量の変化</p> <p>q. フランス革命におけるサンキュロットの出現、武家服飾の発生、明治以降の洋服化、近代のスポーツの普及、婦人スラックス慣用化など衣服の体形型への近接《③i、⑩e》：衣服形状の変化</p>	<p>⑯ 国 際 同 化 の 原 則</p> <p>例なし</p>

表2. 下衣肌着年表

B C	3000ころ	メソポタミアの古代シュメール文明で毛織物が盛んとなり、ロイン・クロス図S1に羊毛を房状によったものや、亜麻をひだ状に並べたものを用いる。	1868	日本、越中裨図S10増加し始める。
	2500ころ	エジプトで上流階級の男性はロイン・クロス図S2を着用。	1890	階級関係なく、冬には男子長い毛織の股引を着用。 綿下着の流行（洗濯しやすい）
	1600ころ	クレタでは、戦士たちは現代のショーツによく似た短いズボン図S3を用いる。	1923	日本、パッチからステテコへ。
	1500ころ	エジプトにステップ地方からズボン（カルソン図S4）と短いキュロットを持ち込まれる。	1926	日本、猿股図S9、股引、判股引、パンツ流行。
	500ころ	ローマこのころトガ図S5を単衣で着る。	1930	男性向け下着の発明と改良が進んだ。ボタンや紐の代わりにゴムが腰周りに使われるようになり、プロボクサー選手が身につける短いズボンに似たボクサーショーツ（トランクス図S13）が広く売り出される。
	400ころ	ローマ、男子はトゥニカにトガの複式へ。	1935	シカゴのクーパー株式会社の手により、世界初のブリーフ図S14が売り出される。また、男性用の下着も大柄の模様やメッセージ、それにキャラクターイメージがプリントされたものが広く売り出されるようになる。
	A D	400ころ	ローマ時代ガリアに住んでいたゴール人の男子は股引のようなブラコ図S6（＝ブリーチズ、ブレ）と称する脚衣（ゆるやかな半ズボン型式）を着用	1970年代
600～829		アングロ・サクソン七王国時代。ブリーチズ（ブラコ、ブレ）用いる。脚衣はホーズあるいはシーンズという。	1990	ボクサーブリーフ図S15というブリーフとボクサーショーツの特徴を併せ持った下着が売り出された。
794～		日本平安時代、十二単の一部分としてズボン型の緋袴図S7が着用されるようになる。緋袴は表袴でなく、肌着として用いられる。		
1221		日本、「股ふさぎ」よりたふたぎ（……）（後のふんどし）流行する。		
1094～1270		十字軍遠征の影響などにより、男子パド・ショース（靴下）とオード・ショース（半ズボン）、ブレ（長ズボン）が結びついたタイツを形成。		
1440		現在、シャツ図S8と呼ばれている前ボタンで身につけられる男性用の上衣が考案され、膝まで丈がありズボンの中に入れ込み、下履きを兼ね着用した。		
15世紀		室町時代の絵巻物に股引図S9が姿を現す。		
1780		日本、六尺ふんどし図S10用いられ、膝下くらい短いものは、猿股引きといった。		
1800～		手首から足首まで覆うユニオンズ図S11（＝コンビネーション）を着用。		
1791～1820		男性の間でブローズ図S12（＝ドロワーズ）の流行（フランス革命時など、肌にかくにズボンをはいての活動が困難だったため）。		

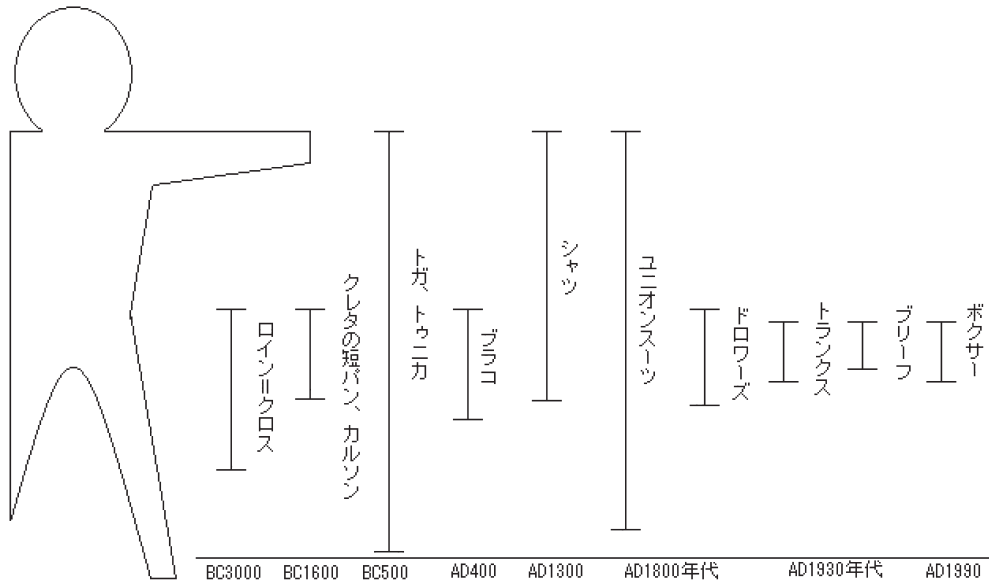


図 1. 下衣肌着着衣量の変遷

衣服の着装方法は、「身体に巻きつける方法」と「道具を用いて留めつける方法」に分類できる。「体に巻きつける方法の肌着」には、腰に布を巻きつけるロイン・クロスと全身に布を巻きつけるトガが該当する。この着装方法では身体に留めつけるための布が多いために大きい布面積が必要で、布重量は重いことが推察される。一方、「道具を用いて留めつける方法の肌着」は、ボタンで留めるシャツやユニオンズーツ、ヒモで止めるカルソンやブラコ、ドロワーズや近年のゴム使用の下衣肌着などが該当し、これらは身体に合わせて縫製されているために少ない布量でも体を被覆する面積を減らすことがない。男性用下衣肌着として現代も一部で用いられているふんどしは道具を用いて留める方法の肌着の一つであると考えられ、この縫製は基本的にヒモを取り付けるためだけになされている。これはふんどしが身体を覆った布をヒモに挟み込む方法で使用されるためであり、使用布量が多い割に身体を覆う面積は少ない。これらのことは縫製箇所の多さと布重量は密接に関係していることを示しており、布重量の変化は、肌着の変化因子であると考えられる。

肌着は最内衣のために着装状態による影響が考えられることから、男子服の変遷を表3にまとめ^{10~12)}、表2との関係を検討した。男子服の形状は、カウナケスやキトンに代表される懸衣からダルマティカのような寛衣、チュニックやズボンの窄衣へと変化している。トータル的な着装に注目すると身体に巻きつけるタイプの肌着は直接身体を覆うことに使われない布が多く、外衣に窄衣形状のズボンを用いると着装は困難であると思われる。ゲルマン民族の移動によってヨーロッパ南部にズボン状衣服が普及したことはよく知られており、表2における窄衣肌着のブラコは、表3におけるゲルマン民族の移動と時代的にはほぼ一致している。このことから、肌着の形状は外衣の影響によって寛衣から窄衣へ変化したと考えられる。日本の衣服の変遷においては、12世紀に狩衣、水干が着用された(表3)のとほぼ同時期にふんどしの流行が起こっ

ており（表2）、これも外衣の変化による肌着の形状が変化を示していると考えられる。また明治以降、男子服の洋装化の進展に伴って下衣肌着がふんどしから股引や猿股へ変化したこと（表2）について日本人が洋服を着るようになって下衣肌着をふんどしからパンツに替えたことと記述¹³⁾されているように、外衣の形状変化の影響を受けて肌着の形状が寛衣から窄衣へ変化したことは明らかである。このように、肌着の形状には外衣の影響が大きく関係しており、特に外衣が寛衣から窄衣へ変化した場合に、肌着の形状も同様な変化をしたと考えられる。

以上のように、男性用下衣肌着の変遷には外衣形状の影響が大きく、変遷因子は‘身体を被覆する面積の変化’、‘布重量の変化’および‘形状の変化’であることが認められた。

表3. 男子服年表

BC3000	メソポタミア、カウナケス（巻衣）着用。	15世紀	日本室町時代、直垂を着用。
BC3000	エジプト、シャンティ（腰巻）とドレーパリー（巻衣）型のカラシリス着用	15～16世紀	ルネサンス様式（伊）…衣服は、下着による体の誇張が見られた。西洋各国の服に国民性が表れ始める。
BC1000	クレタ文明全盛。	16世紀	日本室町時代、南蛮服の渡来。小袖の流行。
BC11世紀～4世紀	ころ 古典様式…ギリシャ・ローマで形成されたキリスト教以前の様式。衣服は布を裁断せずに、体に巻きつけるものが主体。	17世紀	バロック・ロココ様式（伊中心）
BC500	ギリシャ、ドレーパリー（巻衣）型のペプロスやキトン着用（男性丈短いもの多い）	17世紀	ジュストコール、膝丈のキュロットの組み合わせ（仏）
BC20	ローマ、ゲルマン風ズボン、軍人間に浸透し始む。	1789	フランス革命。
		17世紀	日本江戸時代、小袖、羽織、袴の普及。
		1780	ジュストコール衰え、フロック着られ始む。
		1790	男子長ズボン、タイト状（パンタロン）となる。フロックコート普遍的となる。
3世紀	ローマ、有袖のダルマティカ普及始む。	18世紀	サン・キュロット登場。
375	ゲルマン民族の大移動始まる。	18～19世紀	産業革命。
4世紀	遊牧民のブレ（ズボン）がヨーロッパの衣服に影響を与える。	1803～70ころ	男子用燕尾服（テール・コート）普及。
400～1100ころ	ビザンティウム、服飾流行の中心地となる。ズボンとスカートの普及。	1807	男子用のゆるやかなズボン普及。
8世紀	日本奈良時代、唐風の朝服を着用。	1848	ラウンジング・ジャケット出現（後のラウンド・スーツ）
800	サラセン帝国にて、男子のネクタイ、タイト式ズボン現われる。	1868	日本、明治維新。
11世紀	日本平安時代、襲装束（束帯、女房装束）を着用。	1872	日本明治時代、男性礼装の洋装令。
1210ころ	シュールコー、コット重ね着され、男女に用いられ始む。（仏）	1890	ニットの上衣、カーディガン、およびブレザー普及し始む。
12世紀	日本鎌倉時代、狩衣・水干を着用。	1935	ナイロン発明。
12世紀	ヨーロッパでは十字軍遠征と社会的生産力を背景にブリーチという長いチュニック（筒）型のものを着用。	1935	日本昭和、男子服の洋装化
1340ころ	プールボワン、男子用市民服となる。	1945	日本昭和、終戦。
11～13世紀	ロマネスク様式…キリスト教最初の様式。衣服は筒型。	1946	ポリエステル市販される。
13～14世紀	ゴシック様式…尖頭形が特徴。衣服は、立体的な裁断法が発達。		
14, 5世紀	フーブランドとショースの組み合わせの2部式（仏）		

IV. 結 論

従来、人類が世界各地に定着したことにより多様化した衣服の調査や研究が盛んで、その1つとして変遷因子の解明も試みられてきた。衣の歴史は豊かさや安定を求めて人が移動したことによると考えると、自然・社会環境の影響は容易に想像される。また、今日の着装様式に下衣肌着は不可欠であると考えられるが、肌着の調査はあまり見られない状況である。

着衣不要の環境下や物資が乏しく着衣枚数が少なかった時代においても身体下部の被覆が認められることから、本研究は、調査が少ない男性用の下衣肌着に着目して変化の状況と変遷要因の検討を試みた。下衣肌着は文字が示すごとく最內衣のために外衣と無関係ではあり得ず、このため変遷因子は着衣自体の変化として抽出し、外衣の衣服と男性用下衣肌着の変遷因子を検討した。着衣枚数が少ない場合には外衣と肌着の区別が難しいが、肌着の機能を考慮して、着衣が1枚の場合にはこれを肌着として考察を進めた。その結果、①衣服の変化は、布による身体の被覆面積、使用する布重量および形状において生じること、②男性用下衣肌着の変化も、被覆面積、布重量および衣服の形状において生じることが認められた。このように外衣と肌着は着装状況は異なっても変遷因子は同じであると考えられ、着装状況からは肌着の変遷には外衣の影響が最も大きいと考えられた。

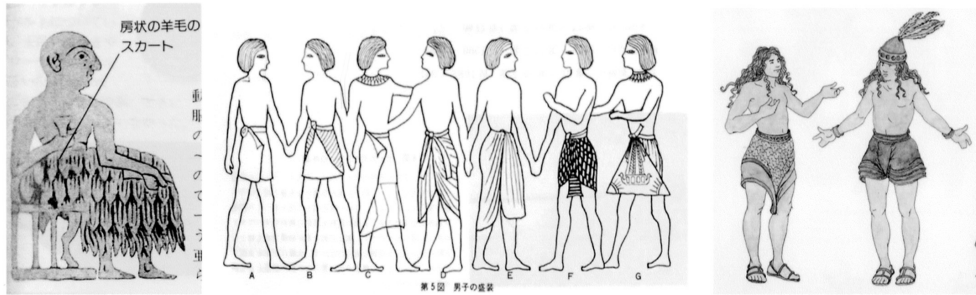
引 用 文 献

- 1) 井上泰男：衣服の民俗学-比較服装史序説-、文化出版局、1982
- 2) 『朝日新聞』2003年8月19日夕刊：「人類の衣服 起源は7万年前？」【ワシントン=村山知博】
- 3) 石山彰（監）：チェコスロバキアの民族衣装、恒文社、1983/石山彰（監）：ポーランドの民族衣装、恒文社、1978/芹川 嘉久子（訳）：ロシアのコスチューム、丸ノ内出版、1976など
- 4) 青木英夫、メイS・青木、青木せつ子：目でみる女性ファッション史、衣生活研究会、1985/プランシュ・ペイン（著）、古賀敬子（訳）：ファッションの歴史 西洋中世から19世紀まで、八坂書房、2006など
- 5) 横田尚美：1920年代の日本女性洋装下着--女性雑誌を中心として、ドレスタディ、1998/姫野カオルコ：コルセット新潮社、2006/エリー・木内：アントワネットの贈り物 女性の下着のなないしょ話、河出書房新社、2002など
- 6) アンドリュー・ランゲリー、中世ヨーロッパ入門、あすなろ書房、2006/青木英夫、西洋男子服流行史、源流社、1994/中井長子：西洋服装史の周辺、繊維製品消費科学、2006など
- 7) 小川安朗：服飾変遷の原則、文化出版局、1981
- 8) セシル・サンローラン：女の下着の歴史、文化出版局、1981
- 9) <http://ja.wikipedia.org/wiki/>
- 10) 青木英夫：下着の文化史、雄山閣出版、2000
- 11) 深井晃子：世界服飾史、美術出版社、2006
- 12) <http://www.costumemuseum.jp/>
- 13) 横田徳男：パンツ物語、あかね書房、1994

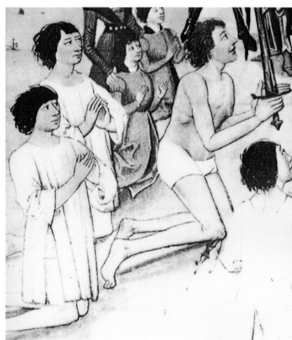
資料説明

- 図S1) L.ローランド＝ワン：衣服の歴史図鑑、あすなろ書房、2005
- 図S2) 大橋信夫：西洋服飾史、東京堂出版、1999
- 図S3) ピエロ・ヴェントゥーラ：ファッションの歴史、三省堂、1994
- 図S4) セシル・サンローラン：女の下着の歴史、文化出版局、1981
- 図S5、6、11、12) 青木英夫：下着の流行史、雄山閣出版、1992
- 図S7) 武田佐知子：衣服で読み直す日本史 男装と王権、朝日新聞社、1998
- 図S8) アンドリュウ・ラングリー：中世ヨーロッパ入門、あすなろ書房、2006
- 図S9、10) 横田徳男：パンツ物語、あかね書房、1994
- 図S13～15) <http://www.gunze.co.jp/>

下衣肌着の変遷図説



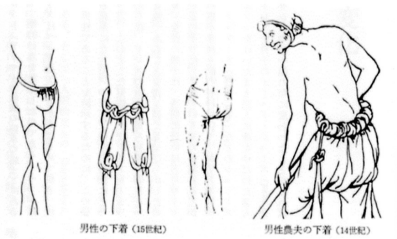
図S1) シュメールのロイン・クロス 図S2) エジプトの様々なロイン・クロス 図S3) クレタの短いズボン



図S4) カルゾン(15世紀図)



図S5) トガ



図S6) ブラコ (=ブリーチズ、ブレ)



図 S7) 緋袴 (右下)



図 S8) 肌着としてのシャツ

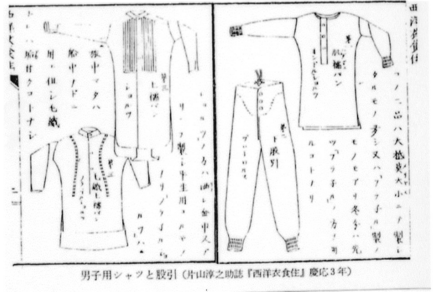


図 S9) 明治時代の男子用シャツと股引

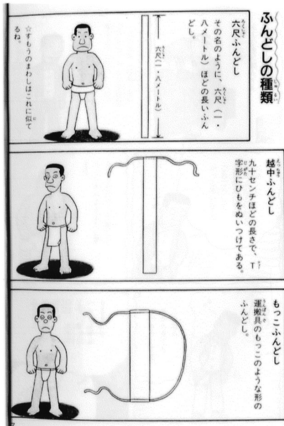


図 S10) ふんどしの種類

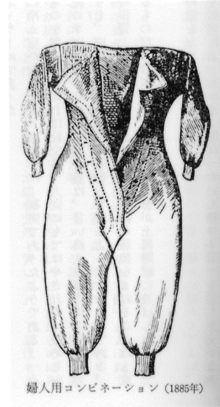


図 S11) コンビネーション

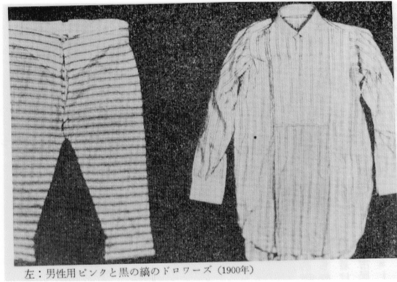


図 S12) 男性用ドロワーズ

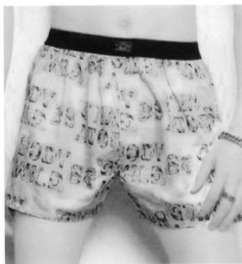


図 S13) トランクス



図 S14) ブリーフ

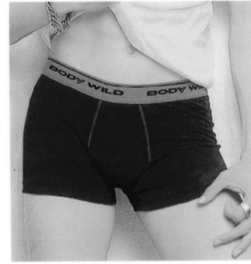


図 S15) ボクサーブリーフ